

## 《資料紹介》 烏丸御池遺跡出土の石刀

山本 雅和

## はじめに

平安京の造営が旧地形の改変をともなう土木事業であったことは、広く認められているところであろう。そして、その後の1200年余りにわたる重複した土地利用により、平安京造営前の遺跡の多くは分厚い盛土に覆われ、現在の地表からその存在を知ることは事実上不可能である。しかしながら、平安京跡の発掘調査では、ほぼ例外なく平安京造営前の遺物が出土することから、それらについての手掛かりを得ることができる。

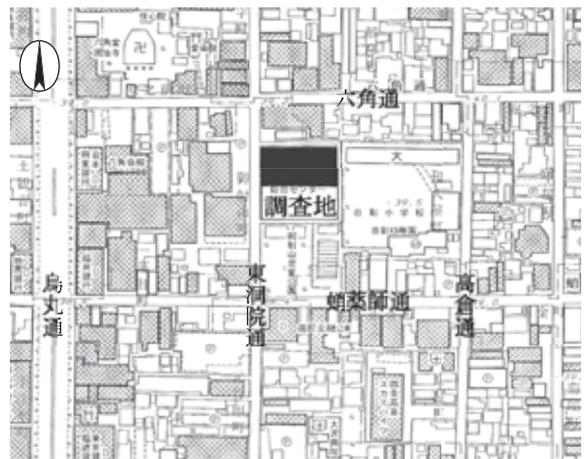


図1 調査位置図(1:5,000)

今回、紹介する遺物は烏丸御池遺跡から出土した石刀である。周知のとおり石刀は縄文時代の祭祀に関わる遺物であるが、近年、各地の石製呪術具の集成が行なわれ、型式の細分・編年はもとより、流通などの問題にまで議論が及ぶようになってきた<sup>(1)</sup>。調査の概要についてはすでに報告を行なっているが<sup>(2)</sup>、ここに改めて紹介を行なうのは石製呪術具研究の進展の一助になることを願うからである。

また、本稿では同じ調査で出土した平安京造営前のその他の遺物の報告を行ない、烏丸御池遺跡に関する資料紹介も兼ねることとする。

## 1. 調査の概要

石刀が出土した調査地は、京都市中京区東洞院通六角下る御射山町に位置し、平安京左京四条四坊二町北西部ならびに烏丸御池遺跡南東部にあたる(図1)。

烏丸御池遺跡は、北側は押小路通、西側は西洞院通、南側は蛸薬師通、東側は麩屋町通の範囲に広がると推定されている<sup>(3)</sup>。これまでの調査では縄文時代から飛鳥時代の遺構・遺物を確認している。京都盆地中央部の遺跡として、唯一、縄文時代晩期の住居跡・土器棺墓を検出した「高倉宮下層遺跡」も、この遺跡に包括される<sup>(4)</sup>。しかしながら、遺跡の詳細はいまだほとんど明らかとはなっていない。

発掘調査は1990年10月19日から1991年4月26日にかけて実施した。調査面積は約700m<sup>2</sup>である。

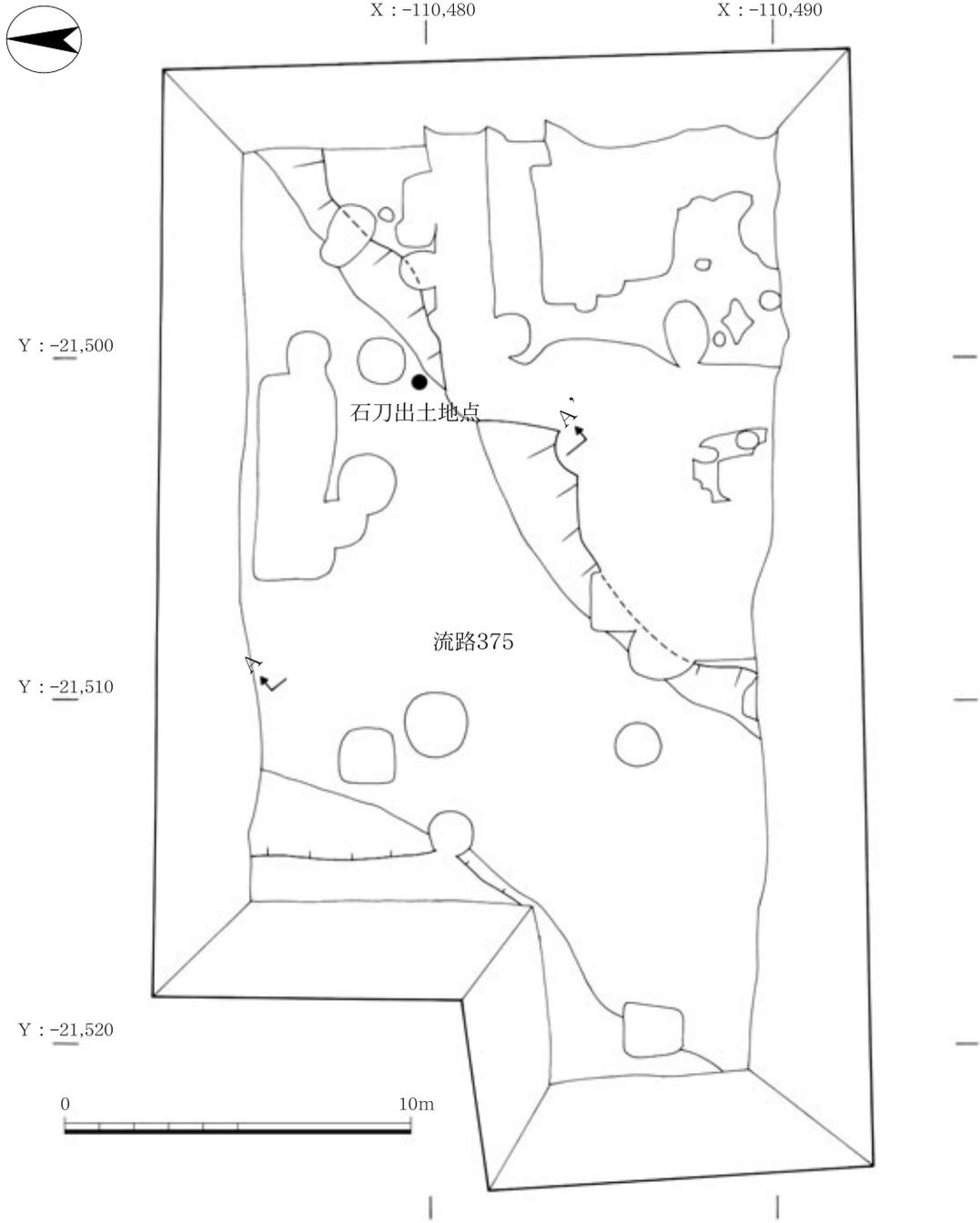
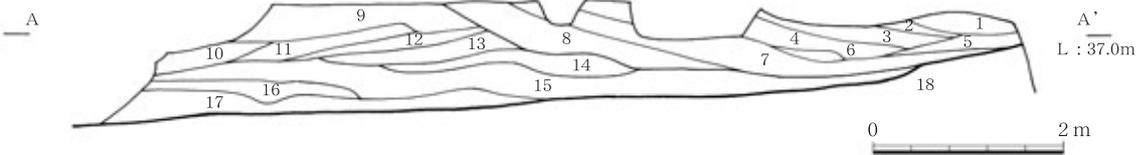


図2 遺構平面図



- |                            |                             |                           |
|----------------------------|-----------------------------|---------------------------|
| 1 にぶい黄褐色砂泥 (径2~5cmの礫を中量含む) | 7 黒褐色細砂 (径2~3cmの礫を中量含む)     | 13 暗灰黄色細砂 (径2~5cmの礫を中量含む) |
| 2 にぶい黄褐色粘土 (径2~5cmの礫を少量含む) | 8 黄灰色細砂 (径2~3cmの礫を中量含む)     | 14 黄褐色細砂 (径2~5cmの礫を中量含む)  |
| 3 灰黄褐色砂泥 (径1~3cmの礫を中量含む)   | 9 灰褐色砂泥 (径2~5cmの礫を多量含む)     | 15 オリーブ褐色砂礫 (灰褐色粘土が塊状に入る) |
| 4 暗灰黄色微砂 (径2~5cmの礫を少量含む)   | 10 灰オリーブ色微砂 (径2~3cmの礫を少量含む) | 16 灰オリーブ色微砂               |
| 5 オリーブ褐色細砂                 | 11 黄褐色微砂 (粘土が綺状にはいる)        | 17 暗オリーブ色砂礫               |
| 6 黄褐色粘土                    | 12 オリーブ褐色微砂                 | 18 黄褐色砂礫 (堅く締まる)          |

図3 流路375断面図



図4 流路375 (西から)



図5 石刀出土状況 (北西から)

調査は江戸時代の遺構面から開始し、桃山時代から江戸時代の井戸・土壇・溝・堀・柱穴、室町時代の土壇・柱穴・つくばい、鎌倉時代の土壇・柱穴、平安時代の井戸・溝・土壇・柱穴などの多数の遺構を検出するとともに多量の遺物を採集した。

石刀は平安時代の整地層の下面で検出した流路375から出土した(図2・図3・図4)。流路375は平安時代以降の遺構により著しく攪乱を受けているが、調査区の北東から南西方向に延びていたことがわかる。検出長は約25mで、北西側は底部からの立ち上がりの最下部を確認したのみで、肩部は調査区外となるので幅は20mを超える。底部の高低差から南西に向かって流れていたと推定できる。埋土は礫・砂・砂泥・粘土などからなり、断面の観察から南東側に幅約6.0m、深さ約0.7mの流路が規模を狭めて形成されたことがわかる<sup>(5)</sup>。

石刀は流路375の底部南東側のオリーブ褐色砂礫層(断面図の15層)から先端部を斜め下方に向けた状態で出土した(図5)。掘形や共伴する遺物を認めていないので、埋納されたのではなく、何らかの理由で流路内に埋没したものと推定できる。埋土からは石刀のほかに縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などが出土しており、それらの年代から流路375は最終的には古墳時代後期から飛鳥時代に完全に埋没したと推定ことがわかる。

## 2. 石刀(図6)

石刀は緑灰色の結晶片岩製である。石材の産地は不明。基部は折損しており、残存長23.7cm、最大幅2.4cm、最大厚1.8cmである。

先端部は角が取れた方形で、丸みをおびた小さな面をもつ。刀身は真っ直ぐで基部に向かってわずかではあるが、徐々に幅・厚さを増す。刀身の断面は一方の側縁に刃部をつくり、背部はやや平坦となるが、明瞭な面はない。両側面は中軸線をはさんで対称形を成し、刃部と背部を緩やかな曲面で結ぶ。また、基部に向かって厚くなるため丸みが強調される。

調整は刀身の側面にわずかに敲打の痕跡をとどめるのみで、全体に丹念な研磨を施す。研磨は特に先端部と刃部に著しく、きわめて平滑に仕上げている。研磨は基部の折損部分にも及んでおり、折損後に再調整が行なわれたことがわかる。なお、文様などの装飾は確認できない。

以上の型式的な特徴から出土した石刀は縄文時代晩期中葉から後葉に属すると推定できる<sup>(6)</sup>。

## 3. その他の出土遺物(図7)

平安京造営前の遺物は石刀のほかに縄文土器(1~8)・弥生土器(9~14)・土師器(15~22)・須恵器(23~26)・土錘(27)がある。流路375から出土したもの(1~5・7・9・10・18~21・23・27)が多いが、平安時代以降の遺構や包含層中から出土したもの(6・8・11~17・22・24~26)もある。

縄文土器は深鉢(1・2・5・7・8) 浅鉢(3) 小型鉢(4・6)がある。

1 は内傾する頸部の小破片である。調整は体部外面は横方向のケズリ、内面は横方向のナデで、口縁部は内外面とも丁寧なナデである。頸部外面に1条の沈線が巡る。角閃石を多量に含み茶褐色を呈する胎土の特徴から河内産であることがわかる。縄文時代晩期中葉に属する。

2 は口縁部が肩部から弱く屈曲して開き、端部を丸くおさめる。調整は肩部外面はケズリ、肩部内面・口縁部内外面はナデで、外面の一部にはケズリ・ナデの前の二枚貝条痕がのこる。縄文時代晩期中葉に属する。

3 は内傾する口縁部の小破片である。端部はオサエによる凹凸のある面をもつ。調整は外面はミガキ、内面はナデで、外面の施文部分には赤彩がのこる。北陸系の土器で、縄文時代晩期中葉から後葉に属する。

4 は砲弾形で口縁端部近くに孔列が巡る。穿孔は焼成前に外側から行なう。調整は体部外面は縦方向の粗いミガキ、内面は左上がり方向のナデで、口縁部は内外面とも横方向のナデである。

ミガキの単位は明瞭に観察できない。縄文時代晩期後半に属する。

5 は口縁部が体部からわずかに屈曲して内傾する。外面口縁端部の下と肩部に2条の突帯が巡る。肩部の突帯は波形で、下向きの頂点からは縦方向の2本の沈線を施す。また、口縁端部内面にも1条の沈線が巡る。調整は内外面とも丁寧なナデである。縄文時代晩期後半に属する。

6 は口縁部が体部から緩やかに屈曲して内傾する。外面口縁端部と肩部に2条の突帯が巡る。いずれの突帯にもD字状の刻目を施す。調整は体部外面は二枚貝条痕ののち縦方向のナデ、内面

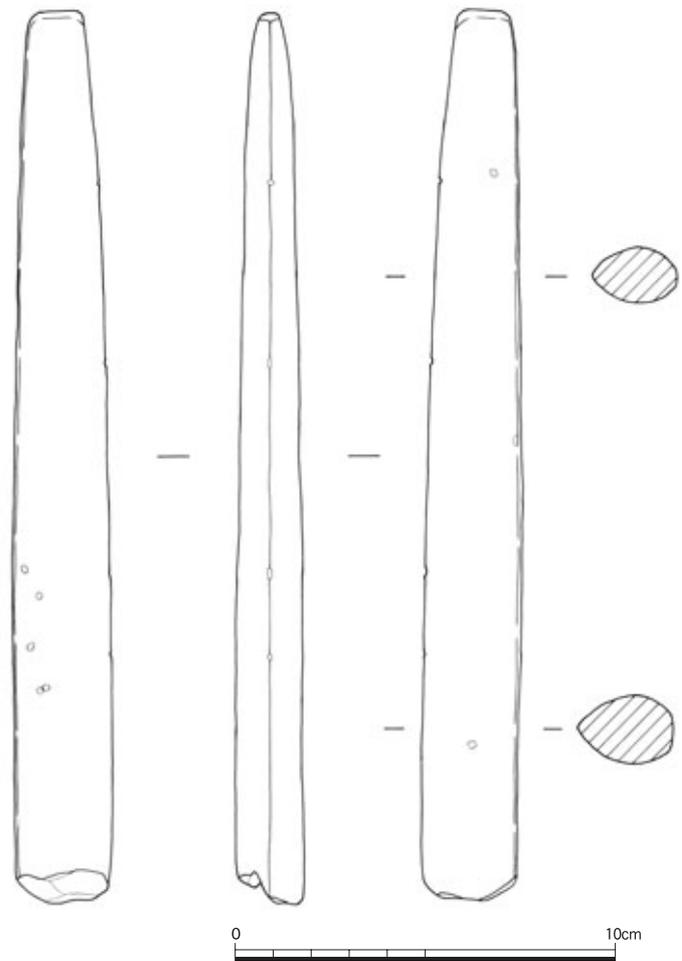


図6 石刀実測図と写真

は横方向のナデで、口縁部外面は横方向のナデ、内面はオサエののちナデである。縄文時代晩期末に属する。

7・8は内傾する口縁部の小破片である。外面口縁端部に突帯が巡る。突帯にはD字状の刻目を施す。調整は表面の損傷のため詳細は不明であるが、内外面ともナデと考えられる。縄文時代晩期末に属する。

弥生土器には壺(9・10)、甕(11・13)、高杯(12)、鉢(14)がある。

9は肩部の小破片である。調整は内外面ともナデである。外面の文様帯は上を刺突文をとまなう2条の沈線、下を刺突文を内にとまなう1条の沈線で区画した間に山形文を施す。山形文には上下にエグリを入れる。弥生時代前期前半に属する。

10も肩部の小破片である。1条の高い突帯が巡る。突帯には刻目を施しており、一部に赤彩がのこる。調整は外面は横方向のミガキ、内面はオサエののちナデである。弥生時代前期に属する。

11は口縁部が体部から外反して開き、端部を丸くおさめる。調整は体部外面はナデ、内面はオサエののちやや左上がりのナデで、口縁部は内外面ともヨコナデである。頸部外面には3条の沈線を施す。弥生時代前期に属する。

12は裾部が外反して開き、端部に明瞭な面をもつ。調整は外面は縦方向の粗いミガキ、内面はヨコナデである。ミガキの単位は明瞭に観察できない。また、柱状部内面にはシボリの痕がのこる。弥生時代中期に属する。

13は平底の底部である。調整は外面はナデ、内面は放射状のハケののちナデである。弥生時代後期に属する。

14は有孔鉢の底部である。穿孔は焼成前に外側から行なう。調整は内外面ともナデである。弥生時代後期に属する。

土師器には壺(18・19)、甕(20~22)、高杯(15・17)、器台(16)がある。

15は口縁部は体部から少し屈曲して直線的に大きく開き、端部を丸くおさめる。調整は表面の損傷のため詳細は不明であるが、内外面ともミガキと考えられる。古墳時代前期に属する。

16は受部は脚部から強く屈曲して外反気味に開き、端部に面をもつ。脚部は裾部が中空の柱状部から外反して開き、端部を丸くおさめる。透孔は3方で外側から穿孔する。調整は柱状部内面はケズリののちナデ、裾部内面はヨコナデである。その他の部位はミガキであるが、単位は明瞭に観察できない。古墳時代前期に属する。

17は裾部が中空の柱状部から強く屈曲して開き、端部を丸くおさめる。調整は柱状部外面はナデ、内面はケズリののちナデで、裾部は内外面ともヨコナデである。古墳時代中期に属する。

18はほぼ完形の小型丸底壺である。体部はやや扁平な球形で、底部は分厚い。口縁部は体部から屈曲して直線的に開き、端部を丸くおさめる。調整は底部・体部外面はナデ、底部内面は左上がり方向のナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデである。古墳時代中期に属する。

19は完形の直口壺である。体部はやや肩が張った扁平な球形で、口縁部は体部から強く屈曲して直線的に開き、端部を丸くおさめる。調整は底部・体部外面はハケののち丁寧なナデ、肩部外面



図7 土器・土製品実測図

はヨコナデ、底部・肩部内面はオサエ、体部内面は横方向の連続するケズリで、口縁部は内外面ともヨコナデである。全体に調整は丁寧で精製されている。古墳時代中期に属する。

20は球形の体部から口縁部が屈曲して開き、端部はわずかに肥厚する。調整は体部外面はハケ、内面は左上がり方向のケズリで、口縁部は内外面ともヨコナデである。古墳時代中期に属する。

21はやや縦長の体部から口縁部が屈曲して開き、端部を丸くおさめる。調整は体部外面はハケ、内面は左上がり方向のケズリで、口縁部は内外面ともハケののちヨコナデである。底部・肩部の外面に1箇所ずつ黒斑がのこる。古墳時代後期に属する。

22は長胴甕の口縁部である。口縁部は体部から屈曲して開き、端部は内湾して丸くおさめる。調整は体部は内外面ともハケで、口縁部外面はハケののちヨコナデ、内面はハケである。古墳時代後期から飛鳥時代に属する。

須恵器には杯蓋(23・24)、杯身(25・26)がある。

23は天井部から口縁部がほぼ垂直に垂下し、端部は内傾する面をもつ。天井部と口縁部の稜は鋭い。調整は天井部外面は右回りの丁寧な回転ケズリ、内面は丁寧なナデで、口縁部は内外面ともヨコナデである。焼成はきわめて良好である。古墳時代中期に属する。

24は天井部から口縁部が外へ開き、端部を丸くおさめる。調整は天井部外面はヘラ切りののち周辺を回転ケズリ、内面はナデで、口縁部は内外面ともヨコナデである。ケズリの方向は不明。飛鳥時代に属する。

25は底部から口縁部が内湾気味に開き、受部・立ち上がり部はともに矮小化している。調整は底部外面はヘラ切り、内面はナデで、そのほかはすべてヨコナデである。飛鳥時代に属する。

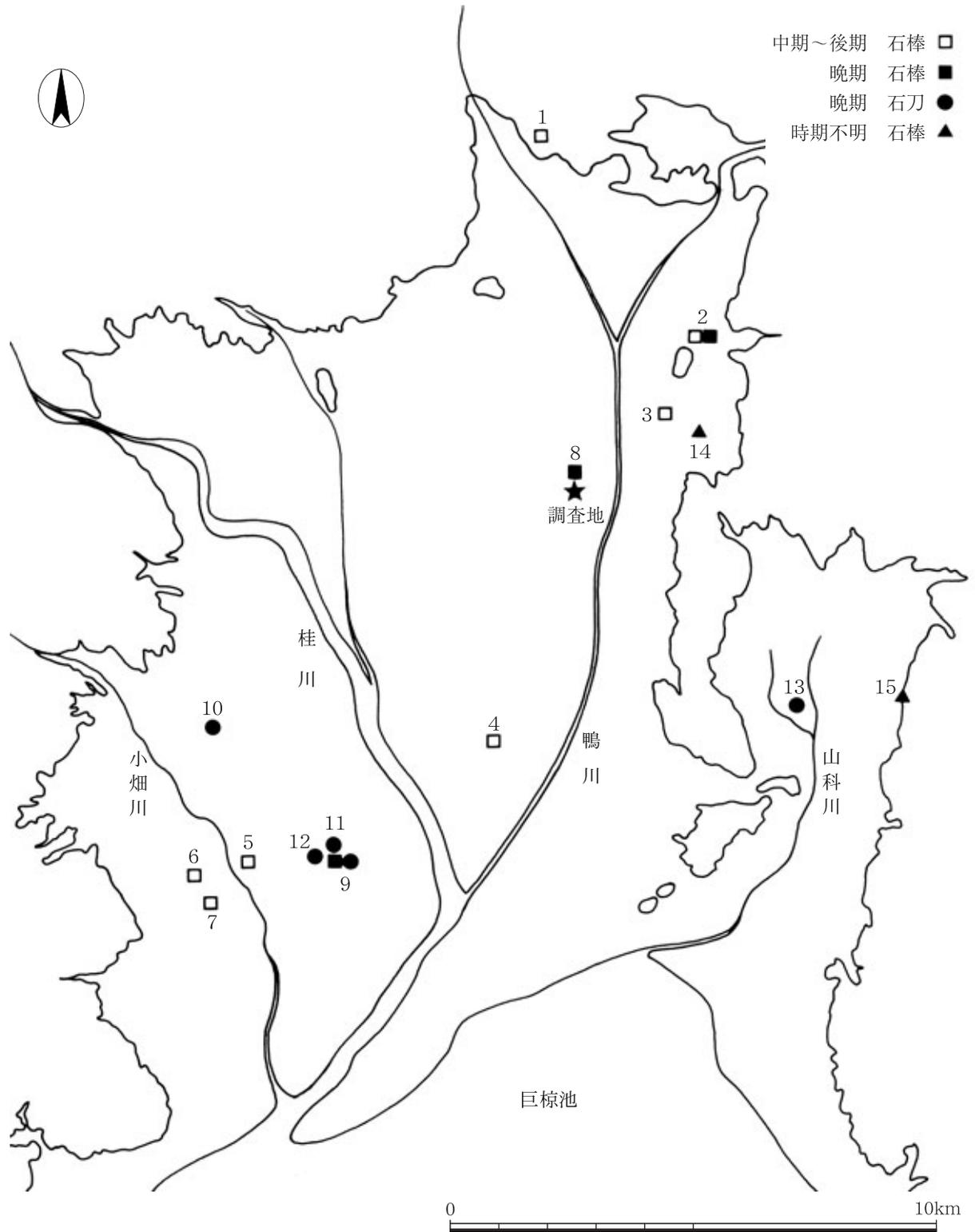
26は平底の底部から口縁部がやや外反して開き、端部を丸くおさめる。調整は底部外面は左回りの回転ケズリ、内面はナデで、口縁部は内外面ともヨコナデである。飛鳥時代に属する。

なお、27は両端がすぼまる円筒形の土錘である。芯材に粘土を巻き付けて手捏ね成形し、調整は全面ナデである。型式変化に乏しい土製品なので所属時期は限定できない。

## おわりに

最後に石刀と出土土器の関係について整理しておきたい。調査で出土した縄文土器の型式を改めて整理すると、4・5は型式の確定が難しいが、1・2は滋賀里 b式、3は下野式または長竹式、6～8は長原式に属すると考えられる。したがって出土した縄文土器は縄文時代晩期中葉と晩期末の2時期に分けることができる。縄文時代末には石棒・石刀とも粗製品となることが指摘されていること<sup>(7)</sup>を考慮すると、出土した石刀には縄文時代晩期中葉の滋賀里 b式の土器がともなうと考えるのが妥当であろう。これらの土器がいずれも流路375から出土していることも矛盾しない。

京都盆地で石棒・石刀が出土した遺跡は15を数える(図8)<sup>(8)</sup>。今回紹介した調査地から北へ約200mの位置にある「高倉宮下層遺跡」からも石棒が2点出土している<sup>(9)</sup>。京都盆地には、ま



1 上賀茂 2 北白川追分町 3 聖護院 4 上鳥羽 5 南山 6 井ノ内 7 今里 8 高倉宮下層  
9 鶏冠井 10 中海道 11 石田 12 高田 13 中臣 14 岡崎 15 大宅廃寺下層

図8 石棒・石刀出土遺跡分布図(注8文献を基に作成)

だ多くの縄文時代の遺跡が眠っていることであろう。これらの遺跡の実態を明らかにするためには、今後、一層の綿密な調査による資料の蓄積が必要である。

なお、石刀の観察については中村豊氏、縄文土器の年代については中村氏ならびに梅川光隆氏・菅田薫氏からご教示を得た。記して感謝いたします。

#### 註

- (1) 小林青樹編『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』国立歴史民俗博物館春成研究室 2000年ほか。
- (2) 山本雅和「平安京左京四条四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (3) 『京都市遺跡地図』京都市文化市民局 2003年。
- (4) 南博史ほか「平安京高倉宮下層遺跡の調査」『平安京左京三条四坊四町』(財)京都文化財団 1988年。
- (5) 調査では掘削中に流路が重複した状態を十分に把握することができなかつたため、遺物を層位的に厳密に採集することができなかつた。
- (6) 後藤信祐「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(上)(下)」『考古学研究』33 3・4 1986・1987年。  
後藤信祐「遺物研究石棒・石剣・石刀」『縄文時代』10 1999年。  
秋山浩三「縄文時代石刀の変遷」『京都考古』62 1991年。
- (7) 中村豊「近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉 縄文から弥生」『縄文・弥生移行期の石製呪術具3』2001年、および注(6)秋山文献。
- (8) 千葉豊「京都盆地の縄文時代遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報1989～1991年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1993年。
- (9) 註(4)に同じ。

## 研究紀要 第9号

発行日 2004年3月31日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 〒602-8435  
京都市上京区今出川大宮東入る元伊佐町265-1  
TEL(075)415-0521 FAX(075)431-3307

ホームページ <http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 日本写真印刷株式会社